下野市書道連盟講話会

郷土で育てる書文化１

下野市に遺る名碑

亀田鵬齋書

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑

令和四年五月一日（日）一一：〇〇～一二：〇〇

会場　下野市コミュニティセンター友愛館ホール

講師　大浦舟人（栃木県書道連盟副会長）

黄梅寺（おうばいじ）跡

黄梅寺は江戸湯島霊雲寺（真言律宗）の末寺で、寛文年間（一六六一～七二）に本吉田を知行した旗本松前氏（松前泰広）の祈願寺として深玄律師が開基したと伝えられる。明治4年（一八七一）の「黄梅寺境内麁（そ）絵図」によると、境内には本堂、経蔵、供養塔、宝篋印塔、弁天が設けられていた。明治22年（一八八九）に吉田村が成立すると、境内に明治31年（一八九八）まで吉田村役場が置かれ、庁舎は本堂や不動堂とともに平成初期まで残っていたというが、現在は廃寺となっている。旧境内には亀田鵬斎書「黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑」と石造の宝篋印塔が往時を偲ばせている。宝篋印塔は高さ4.7mで、石造のものとしては比較的大型で市内最大のものである。蓮華の請花上部2段目の基礎四面には「享保二十星紀乙卯仲春鬼宿日」とあり、享保20年（一七三五）に造立されたことがわかる。

※宝篋印塔とは墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種で、「宝篋印陀羅尼」（呪文）を内に収めた供養塔をいう。

現在の黄梅寺跡地。荒寥とした空き地に放置された宝篋印塔、黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑、柘植の木が栄枯盛衰の感傷を誘う。

今宮神社
南河内東体育館
ガーデン
倶楽部
日新けあセンター
東権現神社
本吉田
下坪山
吉田局
44
坪山橋
前田道路栃木合材工場
44
辰巳橋
35

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑

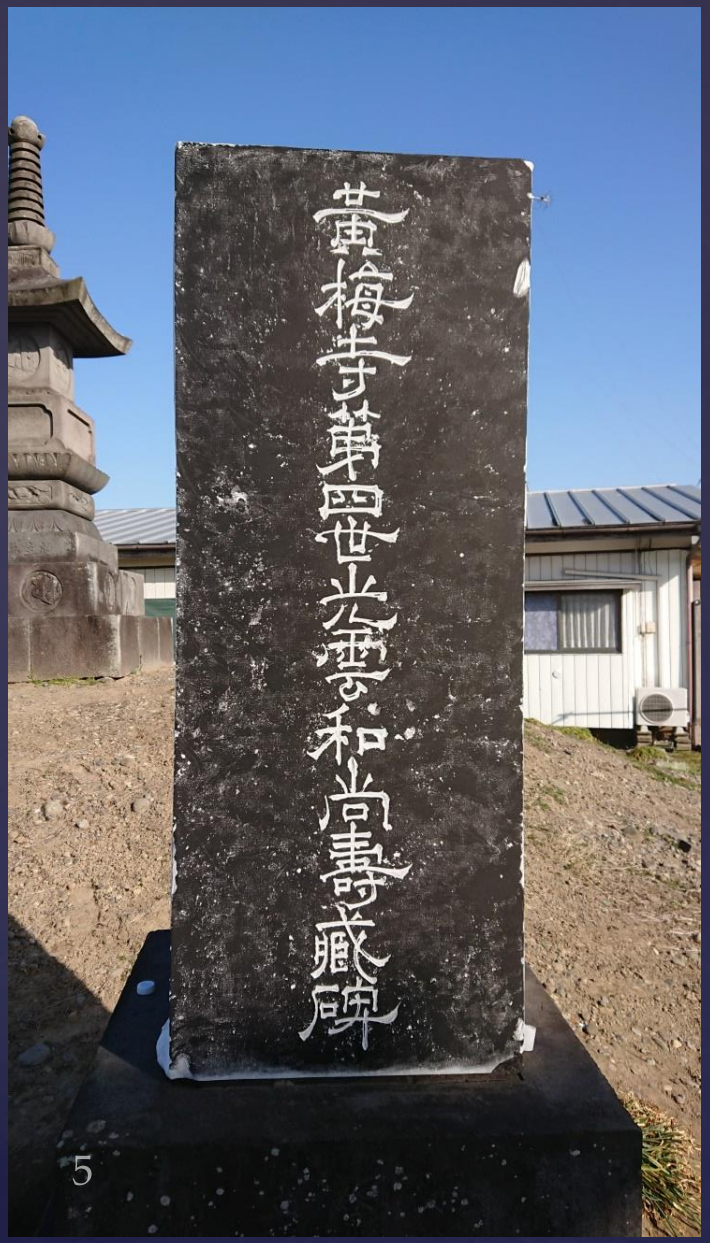
所在地　栃木県下野市本吉田七四六―九　黄梅寺廃寺跡（湯島の霊雲寺所管）
揮毫年月　文化十四年（一八一七年）七月　この時、光雲和尚は六十九歳
撰文及び書者　亀田鵬齋（一七五二～一八二六）揮毫時六十六歳
碑文　碑陽隷書十三字　碑陰碑側楷書六七六字
全文六八九字（碑座立碑教下弟子名は除く）
碑格　碑身　五三cm×五三cm×一三九cm
碑座一段　一〇三cm×一〇七cm×４０cm
碑座二段　七八cm×八〇cm×四〇cm
石工　記載なし

光雲和尚（一七四九年～卒年不詳）

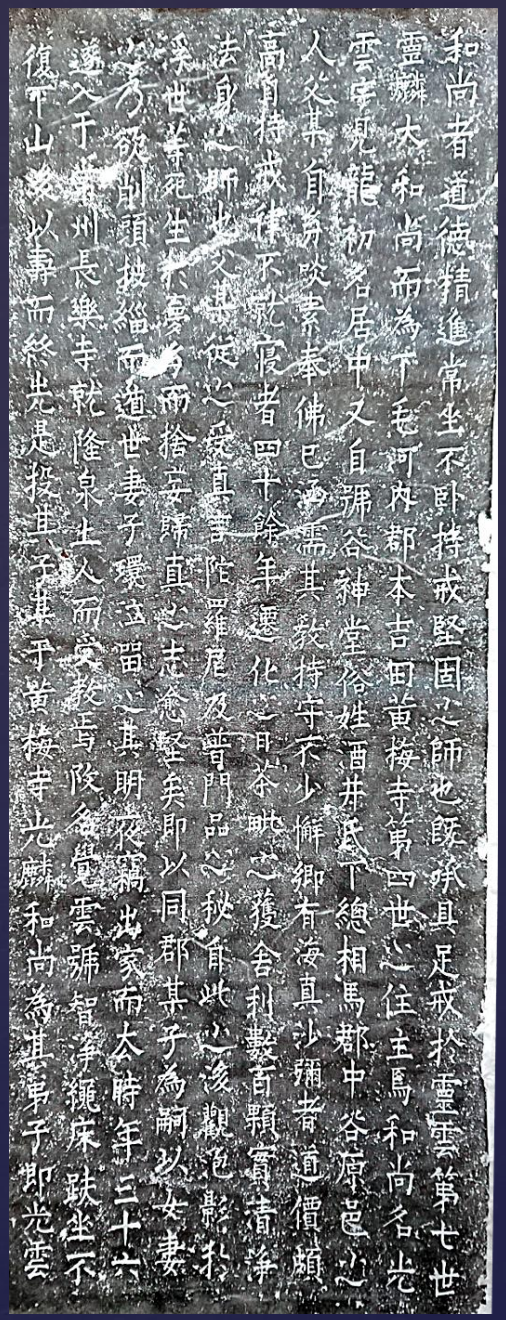
黄梅寺第四世住主（住職）。下総国相馬郡中谷原村（現在の茨城県取手市中部）の出身で俗姓は酒井。名は光雲、字は見龍。初名は居中、号は谷神堂。父覺雲により十二歳の時に黄梅寺の光麟和尚の弟子となり、後に第四世として黄梅寺住主を継ぐ。

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑

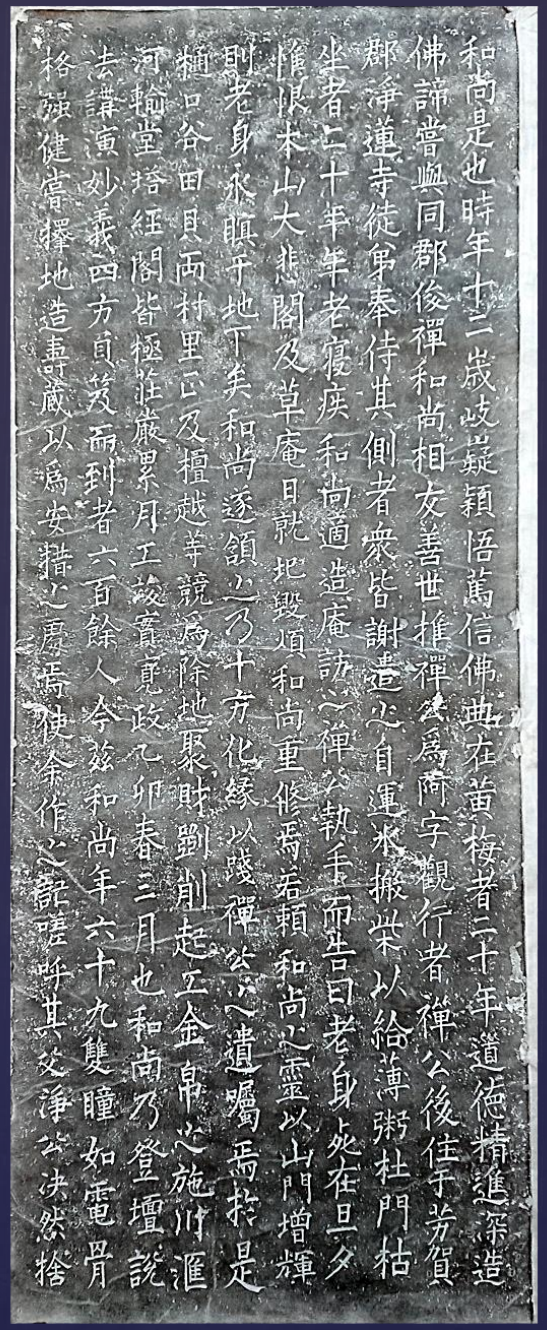
（一八一七年　下野市本吉田）



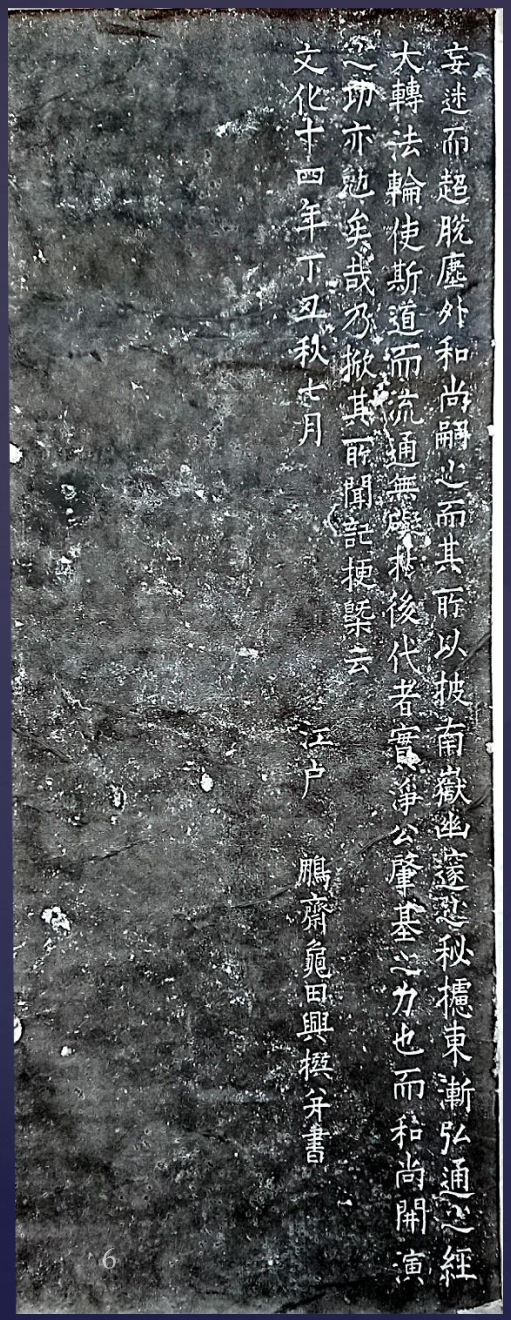
黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑（一八一七年）の拓影（二面から）



和尚者道德精進常坐不卧持戒堅固之師也既受具足戒於靈雲第七世
靈麟大和尚而為下毛河内郡本吉田黄梅寺第四世之住主焉和尚名光
雲字見龍初名居中又自彌谷神堂俗姓酒井氏下總相馬郡中谷原邑之
人父某自為談素奉佛已久需其教持守不少懈鄉有海真沙彌者道價頗
高自持戒律不就寢者四十餘年遷化之日茶毗之後舍利數百顆實清淨
法身之師也又其從之受真言陀羅尼及普門品之秘有此之後觀色影於
矣世壽死生不憂為而捨妄歸真之志愈堅矣即以同郡某子為嗣以女妻
之乃剃頭披緇而道世妻子環立留之其明夜竊出家而去時年三十六
遂入于常州長樂寺就隆泉上人而受教旨改名覺雲號智淨纔床趺坐不
復下山終以壽而終先是投其子某于黄梅寺光麟和尚為其弟子即光雲



和尚是也時年十二歲岐嶷穎悟篤信佛典在黄梅者二十年道德精進深造
佛諦嘗與同郡俊禪和尚相友善世推禪之為商字觀行者禪公後住于芳賀
郡淨蓮寺徒身奉侍其側者衆皆謝遣之自運米搬柴以給薄粥杜門枯
坐者二十年年老寢疾和尚適造庵訪之禪公執手而告曰老身死在旦夕
惟恨木山大悲閣及草庵日就地毁頃和尚重修焉若賴和尚之靈以山門增輝
則老身永瞑于地下矣和尚遂領之乃十方化緣以踐禪公之遺囑焉於是
潮口谷田目両村里巳及檀越等競為除地聚財剏起五金帛之施川滙
河輪堂塔經閣皆極莊嚴累月工竣竟意政乙卯春三月也和尚乃登壇說
去讃演妙義四方貧茂而到者六百餘人今茲和尚年六十九雙瞳如電骨
格强健嘗擇地造壽藏以為安措之處焉使余作之記嗟呼其父淨公決然捨



安迷而超脫塵外和尚嗣之而其所以披南嶽幽邃秘櫃東漸弘通之經
大轉法輪使斯道而流通無窮於後代者實淨公肇基之力也而和尚開演
之功亦勉矣哉乃掀其所聞記梗槩云

文化十四年丁丑秋七月　江戸　鵬齋龜田興撰并書

銘文

第二面（北）碑側　一〇行　二九〇字

和尚者道德精進常坐不臥持戒堅固之師也既承具足戒於靈雲第七世
靈麟大和尚而為下毛河内郡本吉田黄梅寺第四世之住主焉和尚名光
雲字見龍初名居中又自號谷神堂俗姓酒井氏下総相馬郡中谷原邑之
人父某自幼啖素奉佛已涵濡其教持守不少懈郷有海真沙禰者道價頗
高自持戒律不就寝者四十餘年遷化之日荼毘之獲舍利數百顆實清浄
法身之師也父某從之受真言陀羅尼及普門品之秘自此之後觀泡影於
浮世等死生於夢幻而捨妄歸真之志愈堅矣即以同郡某子為嗣以女妻
之乃欲削頭披緇而道世妻子環泣留之其明夜竊出家而去時年三十六
遂入于常州長楽寺就隆泉上人而受教焉改名覺雲號智浄縄床趺坐不
復下山後以壽而終先是投其子某于黄梅寺光麟和尚為其弟子即光雲

第三面（東）碑陰　一〇行　二九四字

和尚是也時年十二歳岐嶷穎悟篤信佛典在黄梅者二十年道徳精進深造
佛諦嘗與同郡俊禪和尚相友善世推禪公爲阿字觀行者禪公後住于芳賀
郡浄蓮寺徒弟奉侍其側者衆皆謝遣之自運水搬柴以給薄粥杜門枯
坐者二十年年老寝疾和尚適造庵訪之禪公執手而告曰老身死在旦夕
惟恨本山大悲閣及草庵日就圮毀煩和尚重修焉若頼和尚之霊以山門増輝
則老身永瞑于地下矣和尚遂頷之乃十方化縁以践禪公之遺嘱焉於是
樋口谷田貝両村里正及檀越等競爲除地聚財劉削起工金帛之施川匯
河輸堂塔経閣皆極荘厳累月工竣實寛政乙卯春三月也和尚乃登壇説
法講演妙義四方負笈而到者六百餘人今茲和尚年六十九雙瞳如電骨
格強健嘗擇地造壽蔵以爲安措之處焉使余作之記嗟呼其父浄公決然捨

第四面（南）碑側　四行　九二字

妄迷而超脱塵外和尚之而其所以披南嶽幽邃之秘攄東漸弘通之経
大轉法輪使斯道而流通無礙於後代者實浄公肇基之力也而和尚開演
之功亦勉矣哉乃掀其所聞記揵槩云
文化十四年丁丑秋七月　　江戸　鵬齋亀田興撰并書

銘文読み下し

※釈　大浦星齋　ご批正をお願いします

和尚、徳を道うに精進し、常に坐して臥せず、持戒堅固の師なり。既に具足戒を霊雲第七世霊麟大和尚より承け、而るに下毛河内郡本吉田黄梅寺第四世の住主となる。和尚、名は光雲、字は見龍、初名は居中、また自ら谷神堂と号す。俗姓は酒井の氏、下総相馬郡中谷原村の人。

父某、幼より素を啖み仏を奉じて已に涵濡す。其の教え持守していささかも懈らず。郷に海真沙禰有り。道價頗る高く、自ら戒律を持して就寝せざること四十餘年。遷化の日、荼毘これ舎利數百顆を獲る。實に清浄法身の師なり。父某、これにより真言陀羅尼及び普門品の秘を受く。此れより後、泡影を浮世に、死生を夢幻に観、而して捨妄歸真の志、愈いよ堅し。即ち同郡の某子を以て嗣と為し、以て妻を女る。これ乃ち削頭披緇にして世遁るを欲す。妻子、環泣して之を留むも其の明夜竊かに出家して去る。時は年三十六、遂に常州長楽寺に入りて隆泉上人に就き教えを受く。名を覺雲、號を智浄と改め、縄床趺坐にして復び山を下りず、後以て壽して終えん。先ずは是れ其の子某を黄梅寺光麟和尚に投じて其の弟子即ち光雲となす。和尚是也時年十二歳岐嶷にして頴悟、佛典に篤信す。黄梅に在ること二十年、徳を道ふに精進し、佛諦を深造す。

嘗て同郡の俊禪和尚と相友となす。善世推禪なる公は阿字觀の行者となり後に芳賀郡浄蓮寺に住す。其れ側に奉侍する徒弟は衆皆この遣を謝し自ら水を運び柴を搬びて以て薄粥を給ふ。杜門枯坐すること二十年。年老ひ寝疾なる。和尚、適たま庵を造るに之を訪ねしに、禪公手を執り告して曰く老身死は旦夕に在り、惟ふに本山の大悲閣及び草庵、日に圮毀に就るを恨む。和尚、重修せんことを煩む。若し和尚の霊に頼らば以て山門増輝にして、則ち老身地下に永瞑せんと。和尚遂に乃十方の化縁を頷之し、以て禪公の遺嘱を践う。於是　樋口、谷田貝両村里は正しく及に檀越等競いて除地となし財を聚めて削起工するに、金帛の施は川匯まりて河となすごとく堂塔経閣を輸すは皆、荘厳を極む。月を累ね工の竣なるは、實に寛政乙卯（一七九五）の春三月なり。和尚乃るに登壇して妙義を説法講演すること四方に負笈、而るに到る者六百餘人。

今茲に和尚年六十九にして雙瞳は電の如く、骨格は強健なり。嘗て地を擇び壽蔵を造す。以爲ここに安んじ措く。余をして之を作さしむ。嗟呼其の父浄公決然として妄迷を捨て塵外に超脱す。和尚これ而るに其所以て南嶽幽邃の秘を披かんと東漸弘通の経を攄ぶ。大轉法輪、斯道をして、後代に流通無礙せしむは實に浄公の肇基の力にして和尚の開演の功亦た勉なり。乃ち其の聞く所を掀げ揵槩を記す。

文化十四年丁丑秋七月　　江戸　鵬齋亀田興撰并びに書

［語彙解説］

持戒　仏教徒たるべき戒律を保つこと。

陀羅尼　能(よ)く総(すべ)ての物事を摂取して保持し、忘失させない念慧(ねんえ)の力をいう。

披緇（ひし）　黒染めの仏衣をまとう

涵濡（かんじゅ）　恩恵が及ぶこと

趺坐（ふざ）　「趺」は足の表の意。足を組み合わせてすわること。また、仏教の坐法の一つである結跏趺坐(けっかふざ)のこと。

沙禰（しゃみ）　具足戒を授けられていない見習い僧

道價（どうか）　僧としての評判

岐嶷（きぎょく）　生まれつき、しっかりしていて立派なさま。

頴悟　すぐれた理解力があり、一際賢いこと。

篤信（とくしん）　信仰心があついこと。

佛諦（ぶったい）　悟り

深造　深く研究する．造詣を深める

阿字観　真言密教の瞑想法の一つ、瞑想により「世界と自分はひとつである」ことを実感すること

杜門枯坐　杜門は門を閉ざし外界との接触を断つこと。枯坐はもの寂しく一人ですわっていること。

旦夕　時期が、この朝か晩かというように迫っていること。

大悲閣（だいひかく）　観世音菩薩像を安置した仏堂。観音堂。

圮毀（ひき）　倒壊毀壊。

頷之（がんし）　承諾すること

十方（じっぽう）　あらゆる方向

化縁（けえん）　仏が衆生を教化する因縁。人々を仏道に教え導くきっかけ。

檀越（だんおつ）　檀家

除地（じょち）　清められた地

雙瞳（そうどう）　一つの眼球に二つの瞳孔があること。「貴人の相」、「金骨の相」とされる。

壽蔵（じゅぞう）　生前に自分で作る墓

負笈（ふきゅう）　笈を負って遠くへ行く意。遠くへ布教に出かけること。

幽邃（ゆうすい）　けしきなどが奥深くて物静かなこと。

東漸（とうぜん）　勢力が東の方へ次第に伝わり広まること。「仏教が―する」

弘通（ぐつう）　仏法がひろまること。

轉法輪（てんぽうりん）　教え（法）の輪を転ずることの意で、ブッダ（仏）の説法をさす。

無礙（むげ）　とどこおらせる障害がないこと。邪魔するもののないさま。

肇基（ちょうき）　基礎をつくること

挺槩（ていがい）　あらまし

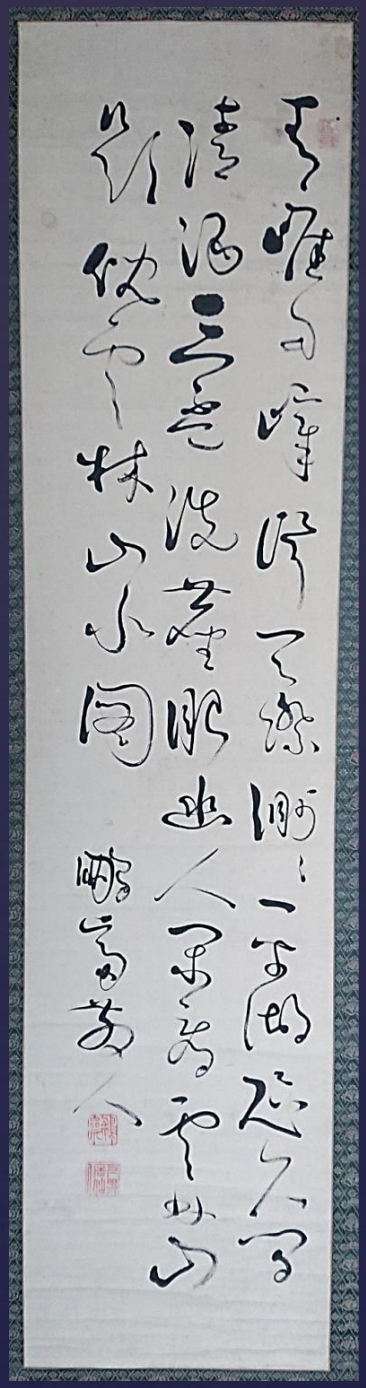
亀田 鵬斎（かめだ ぼうさい　一七五二年～一八二六年）

徳川中期の儒者。寶暦二年十月四日（九月十五日とも）江戸神田に生まれる。名は長興（略して興という）、字は穉龍、初めは名は翼、字は圖南という。鵬齋または善身堂と號した。幼名は彌吉、後に文左衛門と稱した。長じて井上金峨に学び、二十餘歳にして業を市中に開き、赤坂日枝神社の側、駿河臺、本所出村、根岸などに居を轉じ、文化の初めより下谷金杉に住し、文政九年三月九日、同所に歿した。年七十五。遺骸は淺草今戸正福寺に葬る。人となり豪宕不覇にして、學は百家を博綜して、識見甚だ高かった。鵬齋の儒学の師は井上金峨だが、書の師匠は三井親和といわれる。

「亀田三先生傳實私記」

亀田鵬齋「題倪雲林山水図」

雲林山水図をみて題す　※倪は睨に通ず



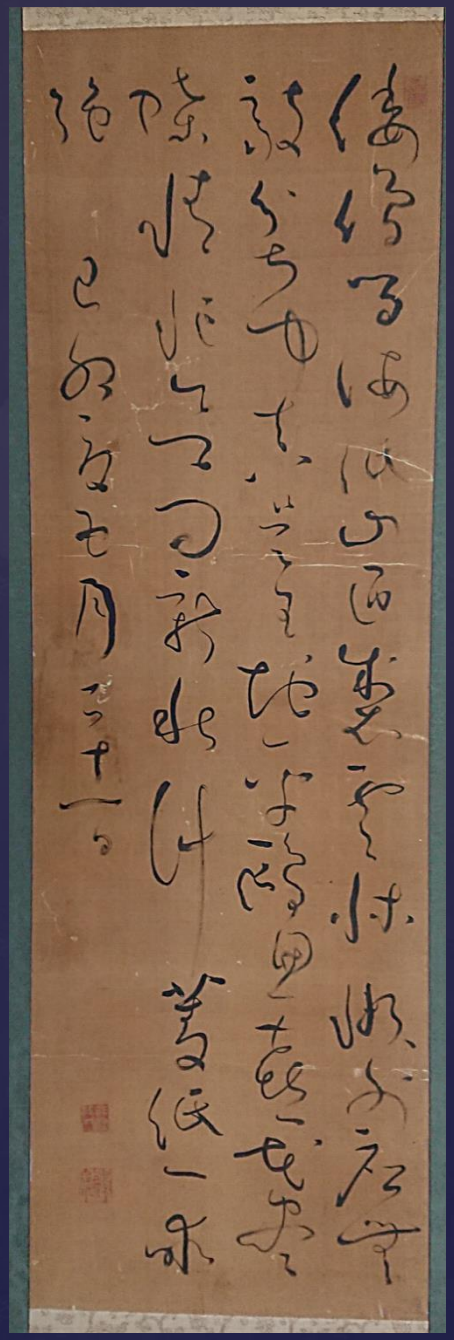
［観星楼所蔵］

青唯好嶂聳天際　渺々平湖咫尺間。
清酒三盃洗塵眼　幽人閑看雲林山。

青なるはこれ嶂聳の天際を好しとす。
渺々たる平湖、咫尺の間。
清酒三盃すれば塵眼を洗い、
幽人は閑かにして雲林山を看る。

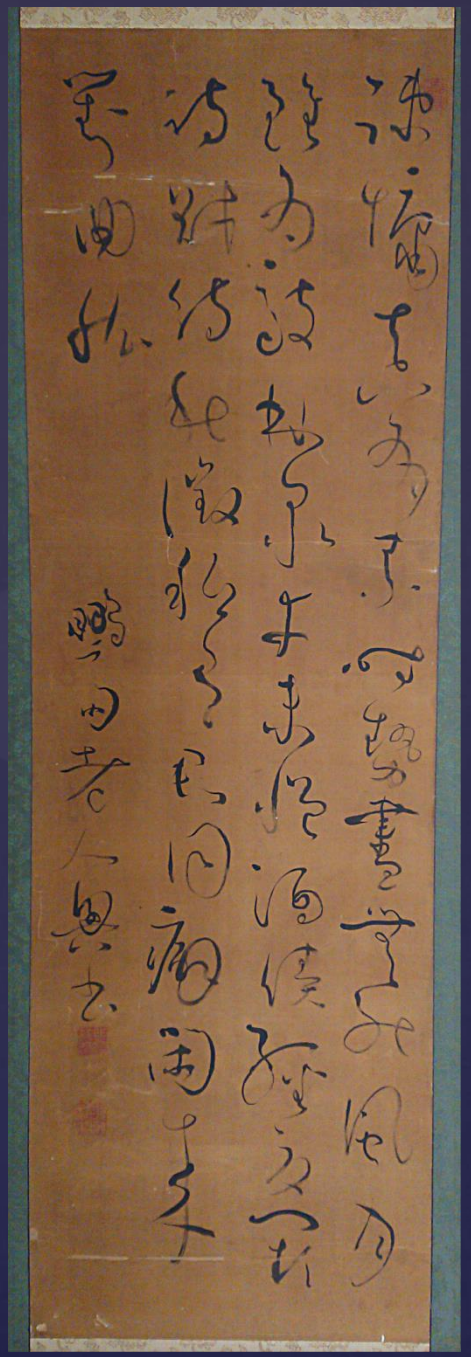
嶂聳…高く険しくそびえる山
渺々…広い水（湖面）
平湖…浙江省嘉興市に平湖市
咫尺…しせき、わずかな距離
　　空と湖面との距離をさす
幽人…世を避けた人

「陸亀蒙詩『襲美見題郊居十首、因次韻酬之以伸榮謝」3



倭僧留海紙　山匠制雲床。　懶外應無敵　貧中直是王。
池平鷗思喜　花盡蝶情忙。　欲問新秋計、菱絲一畝強。

「陸亀蒙詩『襲美見題郊居十首、因次韻酬之以伸榮謝」10



疏慵真有素　時勢盡無能。　風月雖為敵　林泉幸未憎。
酒材經夏闕　詩債待秋征。　只有君同癖　閒來對曲肱。

陸亀蒙（りくきもう、？～八八一年）は、中国・唐の詩人。字は魯望。
皮日休（ひじつきゅう、八三〇年代～八八三年）は、中国・唐の詩人・革命的社会派の学者。字は襲美。友人に、同年代の詩人である陸亀蒙がおり、二人を合わせて皮陸と呼ぶことがある。

下野市書道連盟講話会

郷土で育てる書文化２

心の涵養と癒やしの書

写経に親しむ

《般若心経》

令和四年五月一日（日）一一：〇〇～一二：〇〇

会場　下野市コミュニティセンター友愛館ホール

講師　大浦舟人（栃木県書道連盟副会長）

般若心経とは　（宗派を超えた教え）

『般若波羅蜜多心経』（梵: Prajñā-pāramitā-hṛdaya、プラジュニャーパーラミター・フリダヤ）は、大乗仏教に分類される般若経典群の思想の核心を簡潔に説いた仏典。唐の玄奘三蔵による漢訳。『般若心経』や『心経』は略称である。

仏教の全経典の中でも最も短いものの一つであり古くから日本の在家信者に愛唱される経典で、複数の宗派において読誦経典の一つとして広く用いられている。

「般若」は、事物や道理を見抜く深い智慧、「波羅蜜多」が、悟り・彼岸に至るための行為を意味する語の音写、「心経」が重要な教え（経）を意味し、「深い智慧によって悟りに至るための重要な教え」という経題名と理解される。

般若 → 智恵

波羅蜜多 → 悟りに至る(完成)

心経 → 重要な教え

真言（しんごん）は不思議なり。
観誦（かんじゅ）すれば、無明（むみょう）を除く。
一字に千理（せんり）を含み、即身に法如（ほうにょ）を証（しる）す。

空海「般若心経秘鍵」

真言は不思議な力をもつものである。それを唱えれば
無智の闇が除かれる。一字一字はあらゆる真理を含み、
その身そのままで仏の真理を得ることができるのである。

摩訶般若波羅蜜多心経

二百六十二字

観自在菩薩　行深般若波羅蜜多時
照見五蘊皆空　度一切苦厄　舎利子　色不異空
空不異色　色即是空　空即是色
受想行識亦復如是　舎利子　是諸法空相
不生不滅　不垢不浄　不増不減　是故空中
無色　無受想行識　無眼耳鼻舌身意
無色声香味触法　無眼界　乃至無意識界
無無明亦　無無明尽　乃至無老死
亦無老死尽無苦集滅道　無智亦無得
以無所得故　菩提薩埵　依般若波羅蜜多故
心無罣礙　無罣礙故　無有恐怖
遠離一切顛倒夢想　究竟涅槃　三世諸仏
依般若波羅蜜多故　得阿耨多羅三藐三菩提
故知般若波羅蜜多　是大神呪　是大明呪
是無上呪　是無等等呪　能除一切苦
真実不虚　故説般若波羅蜜多呪
即説呪曰
羯諦　羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦
菩提薩婆訶
般若心経

内容について

般若心経は、お釈迦様の弟子であるシャーリプトラという人物と、観音菩薩との対話という形式になっています。

「舎利子（しゃりし）」とはシャーリプトラのことで、「観自在菩薩（かんじざいぼさつ）」は観音菩薩のことです。

お経全体を通して、仏教の基本である空の思想について解説がなされています。

まず、観音菩薩は「五蘊（ごうん）」には実体がないと説いています。五蘊には色・受・想・行・識という５つの要素があり、これらは人間の意識のもとになるといわれています。つまり、人間の肉体や、感じること、思うこと、行うこと、認識することには、すべて実体がないというのです。

そして、観音菩薩はさらにシャーリプトラに語りかけます。

「形あるすべてのものに実体がないのであれば、その反対に、すべてのものはあらゆる形をとることができる」と。

そしてそれは、人間についても同じことが言える、といいます。

実体がなければ、生まれることも、滅びることもありません。汚れることも、清らかであることもなく、増えることも、減ることもないのです。

真実の世界においては、形あるすべてのものや人間のあらゆる感覚もなければ、悩みや苦しみという概念もありません。

このような「空」の思想を知る仏は、真理に目覚めて心安らかな存在でありつづけます。

観音菩薩は、ひととおり悟りの境地について説いたあと、最後に真言を伝えます。

般若心経の終盤に唱える「羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶」は、悟りに至る真言（マントラ）です。

したがって、この部分は解釈することができません。

ただし、中村元・紀野一義による訳注『般若心経・金剛般若経』では、“往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往ける者よ、さとりよ、幸あれ”という形で翻訳されています。

摩訶般若波羅

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨

市販の手本より

上達の秘訣

1　心を落ち着かせて書く

2　細字で書く前に、半紙に大きく習う
（大きな字を書くつもりでゆったりと書く）

3　筆を立て、始筆は穂先から静かに下ろす

4　転折では少し筆を上げて方向を変える

5　分間を均しくする

6　行の中心を揃える

7　敷き写しであっても、**左に同じ手本を置いて**書く

写経体について

写経体とは、書写体の一種で、歴代の様々な写経にみられる独特な字形。

般

金文

小篆

金剛般若経

三階仏法巻三

春秋穀梁伝集解

五経文字

柳公権
金剛経刻石

欧陽詢
九成宮醴泉銘

褚遂良
伊闕仏龕碑

薛　曜
夏日遊石淙詩

般若心経 書写体（写経体）一覧 ※一部

摩 摩 般 般般般般般般 若 若若若 波 波 羅 羅羅羅羅

蜜 蜜 経 経経経経経経経 観 観観観観観観観観

菩 菩菩菩菩 薩 薩薩薩 行 行行 深 深深 照 照照照

蘊 蘊蘊蘊 皆 皆 度 度度 切 切 苦 苦苦苦

舍 舍 色 色 異 異異異 是 是是是 受 受受受

亦 亦亦亦 滅 滅滅滅 浄 浄 無 無無 无 鼻 鼻鼻

声 聲聲聲聲 触 觸 界 界界界界 明 明明

盡 盡盡盡盡 老 老老老 死 死 得 得得得

所 所所 埵 埵埵 罣 罣罣罣 礙 礙 恐 恐恐恐

遠 遠遠遠 離 離離 顛 顛顛顛顛 夢 夢夢夢

涅槃 涅涅 槃 槃槃 仏 佛佛 世 世 耨耨耨耨

藐菩提 藐菩菩 呪 呪呪呪 能 能能 実 實

虚 虚虚 説 説説 等 等等 除 除 揭 揭

僧 僧 空 空 多 多

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多
時照見五蘊皆空度一切苦厄舍
利子色不異空空不異色色即是
空空即是色受想行識亦復如是
舍利子是諸法空相不生不滅不
垢不淨不增不減是故空中无色
无受想行識无眼耳鼻舌身意无
色聲香味觸法无眼界乃至无意
識界无无明亦无无明盡乃至无
老死亦无老死盡无苦集滅道无
智亦无得以无所得故菩提薩埵

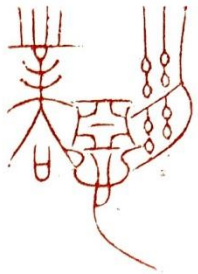
智亦无得以无所得故菩提薩埵
依般若波羅蜜多故心无罣礙无
罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒
夢想究竟涅槃三世諸佛依般若
波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三
菩提故知般若波羅蜜多是大神
咒是大明咒是无上咒是无等等
咒能除一切苦真實不虛故說般
若波羅蜜多咒即說咒曰
揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦
菩提薩婆訶

摩訶般若波羅蜜多心經

般若心經

辛丑十月二十四日

敬書

祈安寧而絶惡業召光明

庚子清明星齋謹書